つた。年は、久安二年である。その間、暇ある毎に船を浮べて、海濱を見聞した一日、清盛、多くの臣下を伴れて沿海を往來する。警固屋町に至つて細い地峡があるを知つた。船をその側近く浮べ、少しく頭を高めて彼方を望めば、地狹を距てゝ海水を見得る。船頭如何に多く共船を陸に走らすことは出來ない。清盛如何に、横紙破りとは云へ、船を以てこの地狹を乘り越すことは不可能である。

一度、志したなら、必ず仕遂げねば止まないと云ふ如何な清盛も、此所へ來れば、仕方なく南方に下つて早瀬の瀬戸を迂廻するのであつた。或日、例の如く、船で此地に來て、また〳〵南方へ迂廻せねばならぬかと思ひ、悶かしいが仕方なく〳〵船を南に向ける。少々風があつたので船足が重い、短氣な清盛、遂に肝癪玉を壞してしまつた。

『此の僅かな所を、みす〳〵遠く十里の餘も迂廻するとは馬鹿氣たこと、この地を切り割つて、遠慮なく船を進めよ。』

むら〳〵と起る清盛の短氣、近臣共、はら〳〵として唯呆然、お互は顔と顔とを見合すばかりであつた。軈て、近侍の一人進み出て、

『我君の御言葉なれど、そは、思ひも寄らず、此の事は、到底、人力の及ぶ所では無し。何卒思ひ止まられよ』

清盛俄かに顔色を變じ青筋立て、

『えゝ云ひ甲斐なき奴、人力で出來ないとか、其時は天魔、鬼神をも使つて見せる。人力で出來ないものは天が下には無い。美事に切り開いて見せる。』

清盛、早速引返し、そのまゝ多くの人夫を使役して、地狹開鑿に力めた。日々使庸する人夫の數、幾千人、天候の善惡を顧みず、費用の多少を思はず、唯、人々を督して瞬時の無駄も與へず、寸刻の餘暇も示さず、勵めば褒め然らざれば罰すと云ふ勢ひであつた。永萬元年七月十六日遂に工を竣る。安藝の民その德を憶ひその後二十一年を經たる元暦元年、石塔を瀬戸の入口に建て、毎年三月三日

踊り念佛の祭禮を行つて、清盛を追福すると云ふ。その高さ、九尺六寸、地方の者は御塔と云ふ。瀬戸を御塔と云ふに至つたのは、これに因る。後ち、穩渡となり遂に音戸となる。

音戸の瀬戸に船を浮ぶ者、必ず彼が頑強を思ひやがては、その天眞爛漫を歌ふであらう。

火の柱

（上）

下野の國、宇都宮に可なり大きな材木問屋があつた。主人を山名屋吉兵衛と云つて、まだ四十三の男盛りである。勿論代々の材木問屋で、この吉兵衛も最初の山名屋から幾代目と云ふのであつた。

數十人の奉公人を使つて、實に大した繁盛であつたが、災難は、何時何處から襲撃て來るかも知れぬもの、折惡しくも、主人吉兵衛が、江戸の深川の木場へ、商用に出た留守中の或晩のこと、山名屋から出火して、一夜の中に灰燼に歸してしまつたのである。神ならぬ身の吉兵衛では、それが何うして知り得やうか。自分の家が灰になつて歸るに宿ない身でありながら、笹の家の二階の八疊の間で、深川の材木商人、川北屋佐助と暖い盃を交はしてゐた。

話は、後へ戻るが、吉兵衛が江戸へ出たのを待つてゐたのは、一人娘のお勢であつた。お勢は十九で山名屋の我儘娘である。母はこの年のはじめ四十二を一期に早逝したので、我儘者のお勢でも、それからと云ふものは、見違へる程、音無しくなつた。もう今年も暮れやうとする此頃では、容子も何だか前の如うな娘氣もなく何とは無く大人氣て居た。

父の吉兵衛が宇都宮を出た頃、お勢は、店の間へ行つて、一人の若衆にちらと眼で知らした。丁度番頭の久七は、帳面の檢べに忙がしかつたので、他へは、少しも氣が散らなかつたし、手代の利三郎では、算盤の球を切りに撥いて居たので誰も、この容子に眼を付ける者は無かつた。

暫く經つて、お勢は、これ迄餘り人が這入らないと云ふ一番藏の古材木の内方側へ行つて、人待ち顔に立つたり覗いたりしてゐた。それは、去年、江戸から新に來た庄之助を待つのであつた。庄之助は、元からの町人では無い。父が、殿からの預つた大切な刀を、仇飯倉某に盜まれ、それが爲、浪々の身となつたのである。それが爲に始終その曲者なり、刀の行方を探してゐるのであつた。所が、ふと、去年の秋の初めに、その刀が、宇都宮の此の材木屋に置いてあつたのを見たと、旅から旅を歩いて、探し廻つて居た仲間市助の報知に會ひ、喜んで色々工夫の末、庄吾を庄之助と改め、手代奉公に入り込んだのである。娘のお勢が、庄之助に懸想してゐるのを幸、惡い事とは思へど、これを種に、あの刀を探して見やうと思ひ立つたのは、過ぐる初秋の頃、主人の吉兵衛さへ不在なれば、樂なものである、と、旅出を待つてゐたのであつた。娘では、熱い情を強くする爲と、庄之助の口車に乘せられて、父の立つを待ち兼ね、店の庄之助を眼で知らしたのである。暫くして、約束の一番藏へ這入つた庄之助は、お勢の顏を見るや直ちに、

『お嬢さん』

『此處よ。お嬢さんなんて云はずに、お勢と稱んで下され』

『これは、恐れ入りました。』

『庄さん。』

『えゝ』

暫くは、沈默が續いた。此の藏は、家の大切な物ばかりが入れてあるので、特別の場合でないと奉公人は元より主人すら、妄りに入らない。お勢は、庄之助に勸められて、父の大切な鍵を盜み出し、先廻りして中に入り庄之助の來るを待つてゐたのであつた。庄之助では、自分の父の嫌疑を晴らす爲めには、何事も、眼を閉ぢて犧牲にし、刀の詮議に餘念がないのである。お勢の乞ひを入れた庄之助は、直ちに、探ぬる刀を聞くのであつた。お勢では、實際、それが何處にあるか又、これまでにでも、その刀があつたのかゞ分らない。

『庄さん、それは知らぬわ』

と云ふより、外に返辭が出なかつた。萬一を思つて手燭を持つて來た庄之助は、

之れに火を點けて、其處此處を探し初めた。お勢も、傍から、庄之助に凭り掛る樣にして附いて歩く。

藏の中は、思つたより廣かつた。下では、別に之れと思ふ品物も見當らないので、今度は、二階へ上つた。お勢も續く。火の光りを窓の隙間からでも漏らさうものなら、後日の爲めによくないと思つたので庄之助は、始終片袖で光りを蔽うてゐた。そうして刀を、探す爲めに、眼は毎常も、品物に散る。

『庄さん、茲に刀がある。これでない？』

『ア、、刀だ。然し私の思ふ刀が何うか。』

と云ひながら、桐の刀箱を靜かに開いた。そして、熱神に檢べた。刄の闇を通す光りは物凄い。其の時傍に置いてあつた手燭の焰が、お勢の後ろに包みものにしてあつた油紙の端を甜めて居た。

『庄之助は、刀に凝視が強い。

『これこそ……噫々有難や』

『庄さん、在つたの』

『御蔭で、探ぬる父の刀は、之に相違御座らぬ。』

餘りの嬉しさに、常の言葉を走らした。お勢は、何だか何だとは思つたが、今しがた、末は變らじと約束したお互のこと、何の疑ひがあるものかと、輕い笑ひに移るのであつた。

そのうち、藏の内は、赤くなつて來る。暫くして、白い烟りが、むく〳〵と卷いて、兩人の後ろから襲うて來た。

『アッ』

と叫んで、楷子を急ぎ降つた。お勢も續いた。何時の間に、火が移つたか、下は眞赤で何處から何れへ出てよいか〻分らない。眼と云はず、鼻と云はず辛い烟が這入る。眼は痛む、鼻は苦しい。呼吸は切ない。火の副射で體全部が熱くなつ

て來る。

藏外では、大勢の往來やら叫び聲の騷ぎやらで焦熱地獄を描き出す。巨人の舌の如うな焔は、ペロリと軒から屋根裏へ甜める。白烟黑烟は、ゆら〳〵と天を焦がす。お勢は、突然の出來事とは云へ、餘りの意外に、唯、足の踏む所を知らない。それでも、庄之助の左手を固く握つて居た。

風は取り分け強い晩であつたから、火の手は、思ふ存分に廣がつて、見る〳〵間に母屋を甜め盡してそれでも猶飽き足らず、山名屋の周圍に置いて在る材木に移つた。火は益々猛り狂ふ。多くの人々は、唯、『アレヨ〳〵』とばかりで、手の着けやうとて知らない。

此の時には、第一番の藏は、既に〳〵灰になつてゐた。

風が東に變つた頃には、夜が明けてゐた。山名屋の家の跡には近鄕近在の見物が黑くなつてゐた。火事の最中、茲の娘が、一人の男と、藏の窓端で、助けを乞

ふてゐたとか、火の附いた衣物を振り立てゝ狂うてゐたとか噂取り〳〵で、哀れな山名屋の話に一日を暮らすのであつた。

庄之助とお勢は、狂ひに狂つて逃げ場を探して居たが、迚も一命を得やうとは思ひもよらぬことであると覺つた庄之助は、父の爲に得た刀を箱諸共、一番藏の窓口から、外へ投げた。それから、娘を吊し出さうと窓の鐵柵を破らうとしたが到底覺束ない。色々氣を配つて居る中に、轟然の響きが兩人の姿を奪つたのである。それは藏一番の大棟が落ちたのであつた。

刀は、其夜何者かゞ拾つて、南方へ去つたと噂せられた。それは、仲間の市助であつた。數日前から、山名屋の主人が江戸へ行くから、その留守中、娘を欺罔して、刀を探す故、夜の五ツの時分第一番の藏の窓下へ來て待つて居てくれ、その時私が刀を捨てるからと……云ひ含めてのことであつた。然し、市助では、こんな大火にならうとは思はない。何うした事であらう。若旦那樣の策略であらうかと、心配しながら火事の模樣を見て居たが、庄吾の庄之助が見えない。そのうち火は、益々大きくなつて來る。軈て、人々が狂ひ集つて來たので、兎に角、火事の濟むまで、若旦那樣を見屆けないと大旦那樣に申し譯がないと獨り、心を痛めた忠義の市助は、大勢の人々の中に混つて、如何に成り行くやと、おど〳〵して夜が明くるまで待つてゐた。

燒け跡には、之れと思ふ人骨も見出さないので、市助では、心の中で喜んだ。然し、一番藏の燻つた棟木の下に、印籠の根附けが落ちてゐた。それは、庄之助が家に在る時、父から讓つて貰つた卍字型に刻まれた珊瑚の根附けであつた。古い竹の先きで、彼處此處と探してゐた市助が、ちらつと眼に映じた時は、何んなに驚いたであらう。胸の邊へ圓い玉でも込み上つて來るやうで、また耳の中は早鐘でも撞くかの如うであつた。

市助が、宇都宮の町端れの河島庄左衞門が佗び住居へ駈け込んで來た時は、往

來は既に人が繁かつた。

（下）

深川の商用を濟ました吉兵衛は、何にも知らずに宇都宮の家へ歸つて來た。家は何處に在るか。人々から始めて聞いた山名屋吉兵衛も、今は娘を失ひ、家を失ひ、また、財寶の悉くまで灰燼にしてしまつたのである。彼は、力を折つて世を傳んだ。今迄代々續いた山名屋も、この吉兵衛の代に至つて、倒れたとあつては先祖へ申し譯けもなく、又、仲間や、世間にまで面目ない。吉兵衛が眼の黑い限り今迄に倍する山名屋を立てゝ見せようぞ、と却て、心を堅くして、忽然東の旅に身を隱した。

其の後、吉兵衛の沙汰が無い。何處で何をして居るのか、昔の山名屋に增した山名屋を建てたであらうか。幾何年の久しい間、誰も噂する者が無くなつた。

然し、宇都宮では半年を經てから或豪家が山名屋の燒け跡へ家を建てた處、又火事に遇つて一夜のうちに灰にしてしまつた。それから、幾人と無く建てゝ見たが、皆々同じ不幸に遇ふそれが爲、その後、誰も、建てやうとはしなかつた。

所が、時々、宇都宮の町では、火の柱を見る。その柱が、闇を破つて、ニユウと直立して、瞬く中に何れかの方へ倒れて遂に薄く消えて仕舞ふ、然も、倒れた所に、家屋でもあれば、必ず、その家屋は一兩日中に火事が起つて灰になる。此の事が、それからそれへと傳はつて、怖れ出した。

『虎公、汝は甘々と貰り居つたな』

『稀には、當然よ』

『糞！俺は、茗荷の子と來やがらあ、忌々しい』

『然う愚痴るない、早く歸つて熱くグツと引懸けて、更め、福の神を見やうぜ。』

『渡世だ、オホ寒い』

『また今晩は、馬鹿に寒いや』

その時、強い北風が、ヒウーと唸つて地上のあらゆる凡てを梳つて矢の如く走つた。と見れば、鶴田の街から眞紅な柱が斜に飛んで、兩人の前へ立つた。

『ヒアー』

『ウーム』

兩人共氣絶してしまつた。柱は幽に南の方へ倒れて消える。その中、虎公が、我れに返つたので、キヨロ〳〵しながら、友の一人を敲き起こした。二人は、豆を食つた鳩同樣、

『兄弟、何うだ』

『ウーム、汝れは何うだ』

『何うも斯うも無い、驚いた』

『魂消るつてあの事だらう。然し、よく助かつた事だねえか。』

『然し、兄弟あれば何だらう。』

『何時まで座つてゐても仕樣が無い。ぼつ〳〵歸らうよ』

『けれ共、俺は、何だか眼の先きへちら〳〵してあの眞紅な光りが消えないや。ブル〳〵』

『何を震つてやがるんだい。少つとは男らしくしろ。日頃の食物が惡いと其んなものだ。然し、とんと忘れてゐたが近頃、餘り遲く夜歩きをすると出會すとは聞いては居たのだが、まさか、あの如うな急に、來やうとは思はなかつた。隣りのお熊婆が、始終俺に話して居た事が思ひ出される、爭はれねえものだ。あゝ想ひ出しても慄つとする。怖ろしいものだね』

『兄弟、何が怖ろしいのだ、馬鹿に獨り合點してるぢやねえか』

『知らねえでもあるめえ。先年山名屋が燒けたゞらう。お前どあのピカッ』

『ウアー』

『何うしたんだい箆棒め、聲に魂消て意氣地が無えぢやねえか。そんな事で、睹場で間違ひでもあれば何うするんだい。確然しろ』

『だつて……ピカッ……と突然に出るんだもの驚いた』

『氣を附けろ』

『そのピカッから何うしたと云ふんだい』

『フム、お前と先の火柱を見た所、ピカッと眼前で光つた所が、昔の山名屋の跡だ。人の噂では、必度、山名屋の娘の祟りだらうとさ。おや……何だか、變に暖かくなつて來たぜ……おや……』

『兄弟、何うせう、ブル〳〵今度は、向うへ光りの無い赤い柱が立つた』

『南無阿彌陀佛々々〳〵々々』

『ブル〳〵南無阿彌陀佛々々〳〵々々』

二人は、霞ひながらも、遂に、尻端折つて灯のある街へ一目散に走つた。

冷い月が、淋しく、山名屋の燒け跡を照らしてゐた。

× × × × ×

其の翌朝、獨りの武士が燒跡で腹を切つて斃れてゐた。見物が集つて、山名屋の祟りに遇つた人だと噂してゐる。やがて、檢死の役人が來て、一々身の圍りを檢べた。その武士は、飯倉某と云ふことが分つた。

それは、山名屋が盛んであつた頃、此の武士が或者の紹介で金子百兩を主人吉兵衛から借りた事があつた。その時庄吾の父から奪つて居た刀を抵當に置いたのである。昨夜遙々山名屋を尋ねて來た所が燒け跡となつて居た。彼は何とは無しに氣が遠くなつて來た。そして怖ろしい火柱が直側へ立つた。不思議にも自分で自分の腹へ刀を通したのであつた。

庄之助の庄吾の父は、歸館が許りて、元の通り三百石を頂戴し、悴れ庄吾の年忌々々は怠り無く、その孝行を人に語つて、露を宿すのであつた。

さても、山名屋の娘お勢の霊は、誰が祀るか。飯倉某が、焼跡で腹を切つた事や、屢々宇都宮の町へ火柱が立つ事などは、庄吾、お勢の怨霊の爲す業と傳へられた。

噫、悲しき火の柱、噫、怖ろしき火の柱。

定價八十錢

世界傳説叢書日本之部卷の一

大正六年四月二十八日印刷
著者　磯部秋蔭
東京市麹町區平河町四丁目八番地
發行人　澤本俊夫
東京市麹町區平河町四丁目八番地
發行所　世界傳説叢書刊行會
東京市芝區兼房町十五番地
印刷者　一噌定次郎
（一噌活版所）

大正六年六月一日發行

12928

355
76

終